

薬物依存の世帯調査

分担研究者 福井 進 国立精神・神経センター精神保健研究所
薬物依存研究部長

研究協力者 和田 清 同研究部室長
伊豫雅臣 同研究部室長

研究要旨住民を対象とした薬物乱用・依存の疫学調査研究は、予防治療、教育対策の重要な指標となるものである。無作意に抽出した1,100人の市川市住民を対象に、訪問留置法にて薬物乱用・依存に関する疫学的調査を施行した。調査内容は薬物乱用に関する意識調査、喫煙率・飲酒率、睡眠薬など合法的な依存性薬物の使用状況、海外生活と薬物乱用の関係、周囲での不法薬物を乱用している人の周知度、不法薬物の乱用に誘われた経験の有無、不法薬物の乱用経験の有無などであった。この調査は、次年度以降の本格的な全国調査の貴重な資料となるであろう。

A. 研究目的

国際的に薬物乱用・依存問題は深刻な社会問題に発展している。

わが国では薬物乱用・依存が社会問題になったのは戦後のヒロポン乱用に始まりその歴史は浅い。しかし、戦後に流行した覚せい剤と昭和42年頃から流行した有機溶剤が20年以上にわたり今日まで主な乱用薬物として社会で乱用されており、多くの覚せい剤・有機溶剤依存者と慢性的覚せい剤・有機溶剤精神病者が発生している。最近海外の影響を受けてコカイン、大麻乱用の流行の兆候がみられ、また医療で広く使用されているベンゾジアゼピン系薬物の依存問題が問題となりつつある²。わが国の薬物乱用・依存をめぐる状況は憂慮される状況

にあるといえる。

薬物乱用・依存は個人の健康にとどまらず、広く社会秩序、公衆衛生を含めた社会全体の問題である。

わが国の薬物乱用・依存の傾向及び実態を明らかにするために学校、医療施設、矯正施設、職場、一般市民を対象とした多面的な疫学調査研究が必要であり、薬物依存の予防・治療・教育対策を考える上で重要な資料となる。

特に、一般住民を対象とした疫学調査研究は重要であり、米国ではhousehold study が薬物乱用・依存の実態の把握と対策の大きな指標となっている。

わが国でも薬物乱用・依存の住民調査が望まれてきたが、今回、市川市民を対象に

疫学調査を実施する機会を得た。

わが国の実情に適した質問内容、調査方法を研究し、併せて市川市住民の薬物乱用・依存の意識、医療用薬物の使用状況、不法薬物の乱用の実態等を明らかにするとともに、この研究結果を次年度の本格的な全国調査の資料としたい。

B. 研究方法

企画は分担研究者の福井が担当し、調査の実施は社団法人「新情報センター」に委託した。

1. 予備調査

- ・地域 市川市
- ・対象 満15歳以上の男女個人100人
- ・調査方法 訪問留置法50人、面接法50人
- ・調査期間 平成4年12月8日～12月16日
- ・調査機関 社団法人 新情報センター

予備調査により調査方法、調査内容を検討し、方法、内容を決定する。

2. 本調査

- ・地域 市川市
- ・対象 満15歳以上の男女個人
- ・標本数 1,100
- ・抽出方法 層化2段無作意抽出法
(地点数=70)
- ・調査方法 訪問留置法
- ・調査期間 平成5年2月9日～3月7日
- ・調査機関 社団法人新情報センター

予備調査の結果、調査方法は訪問留置法とした。

なお、資料の集計は新情報センターが行ない、解析は福井が行なった。

3. 質問内容

予備調査を検討し、別表(末尾)の68か

らなる質問内容を設定した。

C. 結果

1. 調査法の決定

予備調査にて、経験ある調査員10人が訪問留置法、面接法でそれぞれ5件ずつの対象を受けもち、計100人の調査を施行した。調査内容の是非、調査結果、調査時の調査員の印象等について調査員、調査会社、分担研究者らが討議、検討した。

対象者の生活状態、喫煙、飲酒、鎮痛薬等の医療用薬物の使用の有無、薬物乱用の意識等についての質問事項では、訪問留置法、面接法のいずれの方法でも問題はなかった。しかし覚せい剤、有機溶剤、大麻などの不法薬物の乱用経験の有無に対する質問事項では直接面接法よりは訪問留置法の方が回答者は答えやすいとの結論を得た。

その結果、本調査では訪問留置法を採用することにした。

2. 本調査の回収結果

有効回収数(率)は812(73.8%)であり、この種の住民調査では予想を上回る回答率であった。

事故数(率)は288(26.2%)であった。その内訳は下記の通りであった。

表1 事故数(率)

転居	44 (4.0%)
長期不在	18 (1.6%)
一時不在	106 (9.6%)
住所不明	6 (0.5%)
拒否	104 (9.5%)
その他	10 (0.9%)

表3 職業別分類

	総数	男性	女性
対象者【総数】	812	44.7	55.3
※仕事の有無			
自営(計)	105	51.4	48.6
自営業主	79	67.1	32.9
家族従業員	26	3.8	96.2
勤め人(計)	417	58.5	41.5
勤め人(民間会社)	289	71.6	28.4
勤め人(公務員)	34	64.7	35.3
勤め人(パート等)	94	16.0	84.0
学生(計)	80	46.3	53.8
中学生	7	28.6	71.4
高校生	43	41.9	58.1
予備校生	2	100.0	-
専門学校、各種学校	9	66.7	33.3
短大・大学生	19	47.4	52.6
主婦専業	148	-	100.0
無職	56	41.1	58.9
有職(計)	522	57.1	42.9
無職(計)	284	21.1	78.9
無回答	6	83.3	16.7
問41-1. 仕事内容			
自営業主、家族従業員(計)	103	51.5	48.5
農林漁業	6	50.0	50.0
小店主	24	62.5	37.5
工場主	19	57.9	42.1
医療関係事業主	2	50.0	50.0
サービス業	36	36.1	63.9
その他の事業主	16	62.5	37.5
勤め人(計)	411	58.6	41.4
販売従事者	67	58.2	41.8
保安従事者	5	100.0	-
運輸従事者	15	80.0	20.0
通信従事者	-	-	-
サービス業従事者	34	38.2	61.8
技能職従事者	17	41.2	58.8
土木建築業従事者	7	85.7	14.3
工場労働者	32	68.8	31.3
その他の労働従事者	10	60.0	40.0
事務従事者	138	48.6	51.4
管理職職業	30	100.0	-
医療職従事者	12	25.0	75.0
その他の専門・技術職従事者	42	71.4	28.6
その他	2	50.0	50.0
無回答	8	50.0	50.0

なお、調査期間中に調査対象住民より15件の電話による問合わせがあったが、いずれも調査会社の性質を確認する問合わせの質問であった。他の1件は調査員の態度が悪いとの苦情であった。いずれも調査目的、調査内容に対するものではなく、調査は特に問題なく順調に実施されたといえる。

3. 調査結果

調査結果は、紙面の関係もあって、主なものについて報告する。

(1) 回答者の性、年齢、学歴、職業別分類

(表2, 3)

男性363人(44.7%)、女性449(55.3%)であり、女性の方が多かった。年齢、学歴、職業は以下に示す通りである。学歴では大学卒が308人(37.9%)、高校卒が383人(47.2%)であり、高校卒以上の学歴を有する人は85.1%で、高学歴化社会を示す結果であった。なお、小学校卒(尋常小学校を含む)は50歳以上の人に多く、大学卒は20歳代、30歳代に60%近く認められた。

表2 対象の性、年齢、学歴

	総数(X)	男性	女性
総数	812(100.0)	44.7	55.3
年齢			
15~19歳	69(8.5)	8.5	8.5
20~29歳	166(20.4)	20.4	20.5
30~39歳	148(18.2)	19.6	17.1
40~49歳	198(24.4)	23.7	24.9
50~59歳	121(14.9)	16.0	14.0
60歳以上	110(13.5)	11.8	14.9
学歴			
小学卒	21(2.6)	1.9	3.1
中学卒	93(11.5)	11.0	11.8
高校卒	383(47.2)	39.9	53.0
大学卒	308(37.9)	46.6	31.0
無回答	7(0.9)	0.6	1.1

(2) 現在の喫煙率と飲酒率

1) 喫煙率(表4)

現在の喫煙率は、男性58.4%、女性15.6%であり、全体で34.7%であった。

男性は40歳代の喫煙率(70.9%)が最も高く、21本/日以上へのピースモカールの比率も高かった。女性は20歳代の喫煙率(23.9%)が高かった。

2) 飲酒率(表5)

現在の飲酒率は全体で75.1%、男性84.8

表4 現在たばこをお吸いになりますか。

総数	1日 1-10本	1日 11-20本	1日 21本以上	パイプたばこ	以前吸っていたが現在吸っていない	吸ったことがない	無回答
812 100.0	67 8.3	136 16.7	76 9.4	3 0.4	110 13.5	414 51.0	6 0.7

表5 アルコールはお飲みになりますか。

総数	全く飲まない	年に10回以内だが飲む	月に1-2回飲む	週に1回飲む	週に2-3回飲む	週に4回飲む	ほとんど毎日飲む	現在禁酒中	無回答
812 100.0	195 24.0	141 17.4	137 16.9	56 6.9	84 10.3	30 3.7	162 20.0	6 0.7	1 0.1

％、女性67.5％であった。

ほとんど毎日飲む常習飲酒者は全体で20.0％、男性34.7％、女性8.0％であり、男性は40歳、50歳代が、女性は30歳、50歳代が高率であった。

なお、常習喫煙と常習飲酒は正の相関を認めた。

(3) 医療用薬物の使用

1) 家庭に用意してある常備薬の種類 (表6)

特に用意していないと回答した人は60名(7.4％)にすぎず、その他の人はなんらかの常備薬を備えていた。

風邪薬80.9％、胃腸薬79.4％、湿布薬63.9％、鎮痛剤51.2％、ビタミン剤40.8％が多かった。

2) 最近1年間に鎮痛薬を使用した人の比率 (表7)

102名(12.6％)が使用したと回答し、男

性11.3％、女性13.6％で女性がやや高い比率を示していた。

年齢別には20～40歳代では大きな差はなかったが、50歳代の使用が高率(19.8％)であり、特に女性にその傾向が強かった。

週に数回以上の常用者は2.5％であった。

入手先は病院52.0％、薬局14.5％、常備薬32.4％であった。

服用後、「気が大きくなった感じ」「続けてのみたくなかった」と精神依存を形成した人は、各1名ずつ認めた。

3) 最近1年間に精神安定薬を使用した人の比率 (表7)

44名(5.4％)が使用したと回答し、男性5.2％、女性5.6％であった。

年齢は40歳代以上の人から使用率は高まり、特に60歳代以上は13.6％の使用率であった。

週に数回の使用者は0.7％、日に1～3回の

使用者は1.6%であった。

入手先（複数回答）は病院81.8%、薬局6.8%、常備薬9.1%であった。

その殆どが不安、高血圧などの精神的、身体的苦痛の改善を目的として使用してい

た。

「フワフワと酔った気分」「気が大きくなった感じ」「続けてのみたくなる」など精神依存の形成を示したのは2~4名（4.5~9.1%）認めた。

表6 家庭に用意してある薬（複数回答）

総数	特に用意していない	風邪薬	胃腸薬	ビタミン剤	強精強肝剤	鎮痛剤	精神安定薬	睡眠薬	抗生物質	湿布薬	その他	無回答
812	60	657	645	331	27	416	37	22	72	519	72	-
100.0	7.4	80.9	79.4	40.8	3.3	51.2	4.6	2.7	8.9	63.9	8.9	-

表7 最近一年間に次の薬を使用しましたことがありますか。

薬名	総数	使用したことはない	年に数回使用	月に数回使用	週に数回使用	日に1-3回使用	日に数回以上使用	無回答
鎮痛剤	812	710	65	18	8	11	-	-
	100.0	87.4	8.0	2.2	1.0	1.4	-	-
精神安定剤	812	766	19	6	6	13	-	2
	100.0	94.3	2.3	0.7	0.7	1.6	-	0.2
睡眠薬	812	786	12	2	5	4	-	3
	100.0	96.8	1.5	0.2	0.6	0.5	-	0.4

4) 最近1年間で睡眠薬を使用した人の比率（表7）

23名（2.8%）が使用したと回答し、男性1.7%、女性3.8%であり、女性に高率に認めた。

年齢は50歳代以上の人から使用率（5.5~7.4%）は高まり、特に女性にその傾向が強かった。

週に数回の使用者は0.6%、日に1~3回の

使用者は0.5%であり、常用者は1.1%であった。

使用理由は不眠の治療が主であり、不眠が問題となる中高年者に多くなる。

入手先（複数回答）は病院78.3%、薬局4.3%、常備薬13.0%であった。

「フワフワと酔った気分」「続けてのみたくなる」など精神依存の形成を示したのは各1名ずつに認めた。

(4) 薬物乱用に関する意識調査

1) 薬物乱用という言葉を知っているか。(表8)

知っていると回答した人は383名(47.2%)であった。

表8 薬物乱用という言葉を知っていますか

総数	内容を詳しく知っている	内容について多少知っている	聞いたことがある程度	全く知らない	無回答
812 100.0	66 8.1	317 39.0	398 49.0	31 3.8	- -

2) 知っている乱用薬物名について

大麻、モルヒネ、ヘロイン、麻薬、コカイン、覚せい剤、シンナーについては90%前後の人が知っていた。

LSD、ヒロポン、トルエンについては42~67%の人が知っており、有機溶剤、クラックは20%台であり、全く知らないと答えた人は1.8%のみであった。

3) 乱用薬物を使用すると、依存が形成されることを知っているか。(表9)

770名(94.8%)が知っていると回答した。

表9 乱用薬物を使用すると、依存が形成されることを知っていますか

総数	よく知っている	だいたいわかる	知らない	無回答
812 100.0	371 45.7	399 49.1	40 4.9	2 0.2

4) 薬物乱用問題は一般の人々にも関係のある問題であると思うか。(表10)

726名(89.4%)が、関係ある問題であると考えていた。

表10 覚せい剤乱用問題は一般の人々にも関係ある問題だと思いますか

総数	非常にそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	全く思わない	無回答
812 100.0	361 44.5	365 45.0	74 9.1	12 1.5	- -

5) 薬物によってはそれほど危険でない薬物もあると思うか。(表11)

670名(82.5%)が否定していた。

表11 薬物によってはそれほど危険ではない薬物もあると思いますか

総数	非常にそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	全く思わない	無回答
812 100.0	37 4.6	100 12.3	297 36.6	373 45.9	5 0.6

6) 「シンナー遊び」の一部未成年者間での流行の周知度(表12)

778名(95.8%)の人が知っていた。

表12 「シンナー遊び」の一部未成年者間での流行周知度

総数	よく知っている	多少知っている	知らない	無回答
812 100.0	391 48.2	387 47.7	34 4.2	- -

表13 覚せい剤が長年にわたり乱用されていることの周知度

総数	よく知っている	多少知っている	知らない	無回答
812 100.0	236 29.1	488 60.1	86 10.6	2 0.2

7) 覚せい剤が長年にわたり乱用されている
ことの周知度 (表13)

724名 (89.2%) が知っていた。

以上薬物乱用に関する意識調査は、20~40歳代の人に認知率は高く、学歴が高いほど認知している率が高い傾向があった。

(5) 海外滞在と薬物乱用の関係

1) 海外旅行、出張、留学をしたことのある人の比率 (複数回答)

海外に行ったことのない人は441名 (54.3%) であり、その他の人は海外に行った経験を持っている。

旅行が335名 (41.3%) と最も多く、海外出張59名 (7.3%)、仕事で駐在11名 (1.4%)、留学16名 (2.0%) その他であった。

2) 海外滞在中に、薬物を使用した人を見聞きしたか。(表14)

該当者371名中、噂を聞いたことのある人37名 (10.0%)、知っていると答えた人26名 (7.0%) が肯定していた。

表14 海外滞在中に、薬物を使用した人を見聞きしましたか

該当数	知らない	うわさを聞いたことかある	知っている	無回答
371 100.0	300 80.9	37 10.0	26 7.0	8 2.2

3) 海外滞在中に、薬物使用を誘われたことがあるか。(表15)

371名中、19名 (5.1%) が誘われたことがあったと回答していた。

表15 海外滞在中に、薬物使用を誘われたことがありますか

該当数	ない	ある	なんとも言えない	無回答
371 100.0	343 92.5	19 5.1	2 0.5	7 1.9

4) 海外滞在中に、使用した薬物は何か。

371名中、1名 (0.3%) が大麻を使用した経験があると回答した。

(6) 周囲で薬物乱用をしている人の周知度

1) 周囲で薬物を乱用している人を知っているか。(表16)

知っていると回答した人は88名 (10.8%) であった。

表16 周囲で、薬物を乱用している人を知っていますか

総数	知らない	知っている	なんとも言えない	無回答
812 100.0	699 86.1	88 10.8	22 2.7	3 0.4

2) その人が使用している薬物名は。(複数回答) (表17)

覚せい剤19名 (2.3%)、シンナー71名 (8.7%)、大麻12名 (1.5%)、コカイン4名 (0.5%)、薬物不明12名 (1.5%) であった。

表17 その人が使用している薬物はなんですか(複数回答)

該当数	覚せい剤	シンナー等有機溶剤	大 麻	コカイン	ヘロイン	薬物名不明	無回答
88	19	71	12	4	-	12	-
100.0	21.6	80.7	13.6	4.5	-	13.6	-

(7) 回答者が過去に薬物乱用に誘われた経験の有無。

1) シンナー等有機溶剤の使用を誘われたか。(表18)

あると回答した人は24名(3.0%)であった。

2) 有機溶剤を誘った人は誰か。(複数回答)(表19)

該当者24名中、「学校の友人・知人」13名(54.2%)、「その他の友人・知人」1名(4.2%)、「密売人」3名(12.5%)であり、有機溶剤乱用には、友人・知人の

影響が強い。

3) 覚せい剤の使用を誘われたことがあるか。(表18)

あると回答した人は7名(0.9%)であった。

4) 覚せい剤を誘った人は誰か。(複数回答)(表19)

該当者7名中、「その他の友人」4名(57.1%)、「密売人」1名(14.3%)、「見知らぬ人」3名(42.9%)であり、友人・知人以外に見知らぬ人(密売人、乱用者等)の影響も大きいことを示している。

表18 誘われたことがありますか

薬物名	該当数	ない	ある	なんとも言えない	無回答
シンナー等有機溶剤	812	785	24	2	1
	100.0	96.7	3.0	0.2	0.1
覚せい剤	812	798	7	1	6
	100.0	98.3	0.9	0.1	0.7
大 麻	812	786	20	4	2
	100.0	96.8	2.5	0.5	0.2

5) 大麻の使用を誘われたことがあるか。(表18)

あると答えた人は20名(2.5%)であり、覚せい剤に比べて高率であり、回答者には

大麻の方がダーデイのイメージがなく回答しやすかったと推察する。

また、20名中、海外の旅行、滞在経験のない人は3名のみで、17名が海外滞在の経験者であり、海外での生活の影響が大きいことを示している。

いずれも高校卒、大学卒の高学歴者であった。

6)大麻を誘った人は誰か。(複数回答)
(表19)

表19 誘った人は誰ですか (複数回答)

薬物名	該当数	学校の友人・知人	その他の友人・知人	恋人	家族	密売人	見知らぬ人	その他
シンナー等有機溶剤	24 100.0	13 54.2	11 45.8	- -	- -	3 12.5	- -	2 8.3
覚せい剤	7 100.0	- -	4 57.1	- -	- -	1 14.3	3 42.9	- -
大麻	20 100.0	3 15.0	8 40.0	- -	- -	- -	7 35.0	2 10.0

(8)過去・現在に薬物乱用の経験の有無。

1)「シンナー遊び」の経験の有無。

(表20)

「一度も経験したことがない」799名(98.4%)、「過去に数回経験した」11名(1.4%)、「過去に何度も経験した」1名(0.1%)であり、過去に経験した人は12名(1.5%)であった。

男性8名(2.2%)、女性4名(0.9%)であった。

2)覚せい剤の使用の有無。(表20)

「過去に数回経験した」と答えた人は1名

該当者20名中、「学校の友人・知人」3名(15.0%)、「その他の友人・知人」8名(40.0%)、「見知らぬ人」7名(35.0%)、「その他」2名(10.0%)であった。

7)コカインの使用を誘われたことがあるか。
あると回答した人は1名(0.1%)であった。

8)ヘロインの使用を誘われたことがあるか。
あると回答した人は3名(0.4%)であった。

(0.1%)であり、男性であった。

3)大麻の使用の有無。(表20)

「過去に数回使用した」と答えた人は、8名(1.0%)であり、男性6名、女性2名であった。そのうち、海外滞在をしたことがない人は1名のみで、他の7名は海外生活経験者であり、海外での生活経験と関係が高いことを示唆している。

4)コカイン、ヘロインの使用の有無。(表20)

いずれも使用を否定していた。

回答者は、不法薬物の現在の使用をいずれも否定していたが、回答しにくい質問であり、この結果の正否は決めにくい。この

種の調査の難しさを示していた。今後、質問内容をさらに検討する必要がある。

表20 使用したことがありますか

薬物名	総数	一度も経験したことはない	過去に数回経験したことがある	過去に何度も経験したことがある	最近1年間に何度も経験あり	経験あり	無回答
シンナー等有機溶剤	812 100.0	799 98.4	11 1.4	1 0.1	- -	12 1.5	1 0.1
覚せい剤	812 100.0	809 99.6	1 0.1	- -	- -	1 0.1	2 0.2
大麻	812 100.0	804 99.0	8 1.0	- -	- -	8 1.0	- -
コカイン	812 100.0	811 99.9	- -	- -	- -	- -	1 0.1
ヘロイン	812 100.0	811 99.9	- -	- -	- -	- -	1 0.1

D. 考察

欧米では薬物乱用・依存に関する住民調査は国家規模の事業として積極的に行われており、その調査結果は薬物乱用の実態の把握に有効であり、教育、啓発、予防、治療対策を考える上で貴重な資料として利用されている。

わが国において本格的な住民調査の実施が望まれていたが、残念ながら今日までその機会はなかった。薬物乱用問題に対する一般市民の意識、感情を考えた時、住民が調査に協力してくれるか心配された。

今回、われわれは薬物乱用・依存に関する住民調査をする機会を得た。

全国調査に先立ち、平成4年度は千葉県市川

市住民を対象に、薬物乱用・依存に関する疫学的調査を実施し、わが国に適した質問内容と調査方法を検討し、併せて、市川市住民の薬物乱用・依存の意識、医療薬物の使用状況、不法薬物の乱用状況について調査した。

予備調査において、本調査では訪問留置法にて実施することを決めた。欧米のように薬物乱用問題が身近なものとして、より生活の中に入り込んでいる国ではドライに調査が可能であろうが、わが国の状況を考え、一般市民の不法薬物乱用に対する意識、感情を考えた時、面接法より訪問留置法が適していると考えられる。しかし今後も調査を重ねながらさらに検討していく課題である。

市川市は、江戸川をはさんで東京の隣の市であり、人口は平成4年4月1日現在、445,725人（15歳以上364,186人）である。住宅街を主に商業地区、文教地区、工業地区、農業地区に分かれており、日本の平均的都会の性格を備えている。

われわれは、市川市住民を層化2段無作為抽出法にて15歳以上の1,100人を選び、訪問留置法にて薬物乱用・依存に関する住民調査を実施した。

有効回収数（率）は、812（73.8%）であった。調査を依頼した新情報センターがこれまでに実施した調査は平均60%前後の回答率であったことから考えると、この種の調査では高い回答率であったと言える。調査を企画したのが市内では比較的知名度が高い当精神保健研究所であったこと、調査直前に有名な元プロ野球選手の覚せい剤乱用問題がマスコミで大きく取り上げられ、薬物乱用に対する一般の関心が高まった時期であったことなど有利な条件が整っていたが、わが国でもこの種の調査に一般住民が協力してくれることが判明した。

現在の喫煙率は、男性58.4%、女性15.6%、全体で34.7%であった。日本たばこ産業株式会社の平成4年度の調査による喫煙率は男性60.4%、女性13.3%であり、それと比較して市川市の結果は男性でやや低率、女性でやや高率の傾向にあるが、大体において一致している。

欧米では、たばこ、アルコールはヘロイン、コカインなどの依存性物質と同じレベルで捉えているが、わが国では今後喫煙、飲酒の問題をいかに考えていくか、特に未成年者の問題として重要な課題になると考える。

また、喫煙と飲酒の相関性が高く、喫煙の弊害を考えると、飲酒との関係から捉えていくべきであると考え³。

医療用薬物の使用率であるが、「最近1年間に鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬を使用した人」の数（比率）は鎮痛薬102名（12.6%）、精神安定薬44名（5.4%）、睡眠薬23名（2.8%）であり、いずれも女性の占める率がやや高く、50歳代以上の中高齢者に使用率が高く、使用目的もなんらかの精神的、身体的苦痛の治療のためであり、入手経路も病院（医院）、薬局、常備薬であり、不正入手はなかった。典型的な医療目的の使用である^{1・2}。また、いずれの薬物でも2~4名の人に軽い精神依存を形成していると思われる人がいたが、この種の薬物を使用していればいたしかたないことであり、これが乱用に発展することはまずないと考える。

薬物乱用に関する意識調査であるが、わが国の覚せい剤、有機溶剤の乱用状況については90%前後の人が認識していた。

大麻、モルヒネ、ヘロイン、コカイン、覚せい剤、有機溶剤の乱用薬物名は90%前後の人が周知していた。また、それらの乱用薬物を使用すると依存が形成されることも95%が認知していた。

薬物乱用問題については、教育レベルが高いほど認知度が高い傾向を示しており、国民の教育レベルの高さがわが国の薬物乱用をより深刻なものに発展させない原動力となっていると考える。

「回答者の周囲で薬物乱用をしている人を知っているか」との質問で、覚せい剤19名（2.3%）、シンナー71名（8.7%）、大麻12名（1.5%）、コカイン4名（0.5%）の

乱用を知っていると回答した。

事実関係については不明であるが、生活圏で噂程度でもこれだけの薬物乱用者を知っているということは、薬物乱用の社会への浸透を疑わせる結果である。

また、「回答者が過去に薬物乱用に誘われた経験の有無」の質問で、有機溶剤24名（3.0%）、覚せい剤7名（0.9%）、大麻20名（2.5%）、コカイン1名（0.1%）、ヘロイン3名（0.4%）と各薬物にこれだけの人が誘われた経験をもっていると回答した。

誘った人の多くは、「学内の友人・知人」「その他の友人・知人」であり、友人・知人の中に薬物乱用者が存在していることを示しており⁴、上記結果とともに、薬物乱用問題が一般住民の周囲に及んでいる結果であり、啓発・予防・教育面での対策の必要性が緊急に求められる。

「過去、最近1年間に不法薬物の使用経験の有無」の質問では、過去に経験したことがあると回答した人は、有機溶剤12名（1.5%）、覚せい剤1名（0.1%）、大麻8名（1.0%）であり、いずれも最近1年間の使用者はなかった。

事犯検挙者数などから乱用状況を考えたとき、有機溶剤、大麻に比べて覚せい剤の過去の経験者数は少ない観があるが、これが市川市の実態か、あるいは覚せい剤が違法性のイメージが強いことが影響して回答者に防衛的姿勢をとらせたのか、この結果のみではなんともいえない。

これは最近1年間の使用者がいなかったことも上記の問題を抱えていると考える。

また、有機溶剤使用の経験者に未成年者は含まれない。彼らはこの種の調査に回

答しにくいのか、調査対象数が69名と他の年代層に比べて半数以下と少数であったため状況把握が困難であったと考えられる。

対象の選択、質問内容、調査方法など今後の研究課題である。

大麻の使用経験者が多かったが、これは警察庁で発表する大麻事犯検挙者数をはるかに上回る大麻乱用経験者の存在を示唆する結果である。特に、8名中7名が海外生活を経験しており、海外生活と大麻乱用が深く関係していることが推察される。海外との交流が盛んになった現在、大麻乱用者が今後とも増加する可能性が考えられる²。

ヘロインの経験者はいなかったが、麻薬が撲滅されているわが国の状況を考えると当然の結果である。

コカインの経験者もいなかったが、コカイン乱用の流行が心配されている現在、今後ともその動向に警戒していかなばならぬ。

今回、われわれは市川市住民1,100人を対象に薬物依存の疫学的調査研究を行なった。研究目的は市川市住民の薬物乱用・依存の意識、喫煙・飲酒の状況、医療用薬物の使用状況、不法薬物の乱用の実態等を明らかにすることにより、この調査結果を参考にして、わが国の実情に適した質問内容、調査方法を研究することにある。

不法薬物の使用状況の調査に関しては今後さらに検討していかなばならぬ課題である。

この調査を参考にして、次年度は東京を中心に50km圏内、大阪を中心に30kmの2大地区で、各1,500人、計3,000人を対象とした薬物乱用・依存の疫学調査を計画している。米国のNAIDのHousehold Studyも当初

3,000人からスタートしたというが、われわれの調査もNIDAの調査に匹敵するものに発展させたいと期待している。

この種の疫学調査研究は経年的に行ない、経過を追いかけ、年ごとの結果を比較検討することにより統計的意義が発揮されるものである。そして初めてわが国の薬物乱用・依存の教育、予防、啓発、治療、研究対策を考える貴重な基礎資料となると考える。

E. 結論

市川市住民を層化2段無作為抽出法で抽出した満15歳以上の男女1,100人を対象に薬物乱用・依存に関する疫学調査を実施した。

(1)予備調査より、本調査では訪問留置法を取入れた。

(2)有効回収数(率)は812(73.8%)であった。

(3)喫煙率は全体75.1%、男性58.4%、女性67.5%であった。

飲酒率は全体75.1%、男性84.8%、女性67.5%であり、常習飲酒者は全体20.0%、男性34.7%、女性8.0%であった。

(4)最近1年間に依存性医療用薬物を使用した人は、鎮痛薬102名(12.6%)、精神安定薬44名(5.4%)、睡眠薬23名(2.8%)であった。いずれも女性に多く、医療目的の使用者であり、それぞれ数名が軽度の精神依存を形成していた。

(5)薬物乱用に対する意識は概して高く、学歴の高さと関係していた。

(6)海外滞在中に薬物乱用をした人を見聞きした人は371名中63名(17.0%)いた。

(7)周囲で薬物乱用をしている人は、覚せい剤19名(2.3%)、シンナー71名(8.7

%)、大麻12名(1.5%)、コカイン4名(0.5%)、薬物不明12名(1.5%)であった。

(8)過去に薬物乱用に誘われた人は、有機溶剤24名(3.0%)、覚せい剤7名(0.9%)、大麻20名(2.5%)、コカイン1名(0.1%)、ヘロイン3名(0.4%)であり、誘った人の多くは友人・知人であった。

(9)過去に薬物乱用を経験した人は、有機溶剤12名(1.5%)、覚せい剤1名(0.1%)、大麻8名(1.0%)であり、最近1年間の経験者は認めなかった。コカイン、ヘロインの経験者は認めなかった。

(10)この調査を通してわが国でも薬物乱用・依存に関する世帯調査は可能であることがわかった。

(調査実施にあたり当研究所の中山和宏先生より貴重なご助言頂きましたこと厚く感謝いたします。)

F. 参考文献

1. Bejert N: Social Medical classification of addiction. Int J Addict 4:3. 1969.
2. 福井進: わが国の薬物依存の動向と展望. 精神医学 34(8): 815-821, 1992.
3. 福井進: 喫煙習慣の疫学. ニコチン依存研究会記録集 1: p20-30. 1991.
4. 和田清、福井進: 薬物依存の発生因をめぐって. 精神医学 33: 633-642, 1991.

質問内容

- 問 1. ア) 健康状態はいかがですか。
- 問 1. イ) 日常生活、活動に意欲がなくなることがありますか。
- 問 1. ウ) 毎日している仕事でうまくいかないことがありますか。
- 問 1. エ) 日常の生活で不安を感じた、緊張したことがありますか。
- 問 1. オ) 頭痛や頭が重い感じで悩まされることがありますか。
- 問 1. カ) 寝つけなかったり、朝早く目ざめて眠れないことがありますか。
- 問 1. キ) 現在の生活に満足していますか。
- 問 2. 現在たばこをお吸いになりますか。
- 問 2-1. 禁煙をしようとしたことがありますか。
- 問 2-2. 初めてたばこを吸ったのはいつ頃ですか。
- 問 3. アルコールはお飲みになりますか。
- 問 4. 初めてアルコールを飲んだのはいつ頃ですか。
- 問 5. 家庭に用意してある薬 (M. A.)
- 問 6. 常用している薬 (M. A.)
- 問 7. 最近1年間に、しばしば頭が痛くなったことがありますか。
- 問 7-1. どのように対処しましたか。 (M. A.)
- 問 8. 最近1年間に鎮痛薬を使用したことがありますか。
- 問 8-1. 鎮痛剤はどこから入手しましたか。
- 問 8-2. 服用後の経験感覚 (M. A.)
- 問 9. 最近1年間に精神安定薬を使用したことがありますか。
- 問 9-1. 精神安定薬はどこから入手しましたか。
- 問 9-2. 使用理由 (M. A.)
- 問 9-3. 服用後の経験感覚 (M. A.)
- 問 10. 精神安定薬についてどうお考えですか。 (M. A.)
- 問 11. 最近1年間に睡眠薬を使用したことがありますか。
- 問 11-1. 睡眠薬はどこから入手しましたか。
- 問 11-2. 使用理由 (M. A.)
- 問 11-3. 服用後の経験感覚 (M. A.)
- 問 12. 睡眠薬についてどうお考えですか。 (M. A.)
- 問 13. 薬物乱用という言葉を知っていますか。
- 問 14. 知っている乱用薬物の名前
- 問 15. 乱用薬物を使用すると、依存が形成されることを知っていますか。
- 問 16. 日本における薬物乱用の問題状況
- 問 17. 「あへん戦争」について知っていますか。

- 問18. 米国・中南米諸国の「麻薬戦争」について知っていますか。
- 問19. 覚せい剤乱用問題は一般の人々にも関係のある問題だと思いますか。
- 問20. 「自分に薬物乱用の誘惑の手が伸びてくる事がある」と思いますか。
- 問21. 薬物によってはさほど危険ではない薬物もあると思いますか。
- 問22. 「シンナー遊び」の一部未成年者間での流行周知度
- 問23. 覚せい剤が長年にわたり乱用されていることの周知度
- 問24. 家庭内で薬物乱用に関係する話をしたことがありますか。
- 問25. 海外旅行、出張、留学をしたことがありますか。(M. A.)
- 問25-1. 海外滞在中に、薬物を使用した人を見聞きしましたか。
- 問25-2. 海外滞在中に、薬物使用を誘われたことがありますか。
- 問25-3. 海外滞在中に、使用された薬物(M. A.)
- 問26. 周囲で、薬物を乱用している人を知っていますか。
- 問26-1. その人が使用している薬物は何ですか。(M. A.)
- 問27. シンナー等有機溶剤の使用を誘われたことがありますか。
- 問27-1. 誘った人は誰ですか。(M. A.)
- 問28. 覚せい剤の使用を誘われたことがありますか。
- 問28-1. 誘った人は誰ですか。(M. A.)
- 問29. 大麻の使用を誘われたことがありますか。
- 問29-1. 誘った人は誰ですか。(M. A.)
- 問30. コカインの使用を誘われたことがありますか。
- 問30-1. 誘った人は誰ですか。(M. A.)
- 問31. ヘロイン等麻薬の使用を誘われたことがありますか。
- 問31-1. 誘った人は誰ですか。(M. A.)
- 問32. 「シンナー遊び」を経験したことがありますか。
- 問33. 「覚せい剤」を使用したことがありますか。
- 問34. 「大麻」を使用したことがありますか。
- 問35. 「コカイン」を使用したことがありますか。
- 問36. 「ヘロイン」を使用したことがありますか。
- 問37. 性別
- 問38. 年齢
- 問39. 最終学歴
- 問40. 未・既婚
- 問41. 就業形態
- 問41-1. 仕事内容